

都市生活者のための防災・減災

―ふだんの備えをデザインする

インタビュー（2012年11月27日）

濃密なコミュニティが成立しにくい現代の都市生活のなかで、いかにして地域の防災・減災力を高めていくのかは、今大きな課題となっています。そこで、アートやデザインの力を活用して防災・減災のためのツールや仕掛けの数々を開発している、NPO法人プラス・アーツの永田宏和氏を訪ね、東日本大震災以降のマンション開発などにおける新しい動向や神戸で始められている取り組みなどについてうかがいました。

防災・減災への取り組みに アートやデザインの力を活かす

私たちNPO法人プラス・アーツは、阪神・淡路大震災の被災体験をもとに地震に対する考え方をまとめた『地震イットモノ』の企画や、防災・減災を楽しみながら学ぶイベントなどを、地域、学校、企業、マンションなど、これまでさまざまな場所で展開してきました。

私たちが第一に考えているのは、日々の暮らしの中で災害に備えるということ。ただ、それは簡単なように見えて難しい。そのため、

私たちは生活者の興味を引き、意識を高める手法として、アーティストやデザイナーの創意を活かした取り組みを開発してきました。

その基本は楽しみながら学ぶということ。例えば、子どもたちがおもちゃを取りかえっこする「かえっこバザール」というアート・プログラムと家族向けの防災訓練を融合した「イザ！カエルキャラバン！」では、子どもたちが、机の下敷きになった人形をジャッキを使って救助したり、バケツリレー競争や、消火器でスト

永田 宏和

ながた ひろかず

NPO法人プラス・アーツ理事長

■プロフィール

株式会社iop都市文化創造研究所代表。デザイン・クリエイティブセンター神戸[KIITO]副センター長。企画・プロデューサー。2005年にファミリーが楽しく防災を学ぶプログラム「イザ！カエルキャラバン！」を開発、その後、国内だけでなく海外でも展開。三井不動産レジデンシャル、無印良品、東京ガスなどの防災アドバイザーを務める。また、KIITOでアートやデザインの力を活用して社会的な課題にアプローチする「プラス・クリエイティブ」の様々な取り組みも進めている。





防災・減災関連のワークショップでオリジナルの模型を使って講演をする永田和弘氏

ラックアウトのようなゲームをしたりします。楽しいイラストやキャラクターがいっぱいで、ゲーム感覚だから、子どもたちも本当に真剣で熱心です。数年前に始めたこうした試みは、今全国に広がっています。

私たちは、そこに、さらにまちづくりの視点を加えていこうと考えています。イベントのプログラムにしても、できあがったものとしてではなく、地域の人をまじえて現場で考える



阪神・淡路大震災の被災者167人に、被災時からその後の状況をヒアリングとアンケートで尋ねた調査を元にした『地震イツモノート』（木楽舎）。寄藤文平さんのイラストが、被災当時の状況や日常での備えにつながる防災・減災の知恵をわかりやすく伝えている

ことで、その特性や、考えられる災害に応じて独自のものが生まれてくるわけです。

こうしたプログラムのもとになったのが、私たちが行った阪神・淡路大震災の被災者へのリサーチ。それを2007年にまとめたのが『地震イツモノート』です。ここには、実際に地震が起きた時に何が困ったのか？ 現実の避難所生活はどうだったのか？ その時何が役立つたのか？ など、被災者の様々な本音や知恵が並んでいます。書籍化にあたっては、イラストを著名な寄藤文平さんに半ば無理矢理に（笑）お願いしました。被災者の言葉はともも生々しく、重い部分が結構あります。それを柔らかく伝えるには、どうしても寄藤さんのイラストとデザインの力が必要でした。

私たちが今やっていることは、すべてこのリサーチが起点です。つまり被災者の方々に教えていただいたことがもともとなってます。それをどう伝え、どう受け止めてもらうのか。

リサーチの際に印象に残ったのは、当時はとても悲惨だったという証言とは別に、ある種のユートピアだったと言う人がいたことです。みんなが同じ目線に立って助け合った。地域の人も、役所の人も、一致団結して働いた。動くのも早いし、不足は補い合った。ところが何日か経って、物資が届き始めるとエゴが出てくる。もめごとが生じてきたといいます。それを非難し、諦めるのではなく、人間とはそういうものだということをまず知っておくことが必要だと思えます。だからこそ、防災・減災にはコミュニティの視点も重要になってくるのです。

ふだんの暮らしのなかで 地域の力を高めていくために

マンションなど、現代の都市生活のなかでは、濃密なコミュニティが成立しにくいのは確かです。私たちが今、行政やデイベロッパーなどとともに取り組んでいる経験から言っても、そこに、日常から助け合う力を育んでいくのは容易なことではありません。

しかし結論としては、諦めず、少しでも良くなるためにいろいろなことをやってみるということだと思います。結局これは、息の長いまちづくりと同じことだと言えるでしょう。

例えば、何百戸のマンションで、防災・減災のイベントに、一度に全員を引っ張り出すのは無理ですが、10人なら何とかなりそうです。10人が15人にと、少しずつ増えていくように努める。子育て世代に働きかけるには、「イザ！カエルキャラバン！」などのプログラムが使えますが、高齢者層の場合は学びのある場や食と関係したテーマなどが考えられます。例えば、炊き出しセットを使って実践したり、練習してもらったりする機会にして、できるだけ大勢の人に来てもらおうと、あの手この手でアプローチしています。

やはりどこか孤独感を感じておられる住人の方も多いようで、一度参加すると、他の住人と知りあえて良かったという感想もよく聞きます。だから、そこに住んでいる人たちに寄り添って、求めているものを見極めながら進めていくべきでしょう。ただし、最初は仕掛けていくけれども、それは種を持っていくということ。住人を巻き込みながら、企画の中にも入ってきてもらい、やがて我々は引いていき、最後は自立してもらおうのが理想です。

皆が真剣に考え始めている マンション開発での防災・減災

千戸単位の大きなマンションだと、災害時には自主的に対策本部をつくらないといけないくらいの規模です。しかし、ふだんは他の住人と全く会わない生活もできるし、ふれ合う必然性がないから、コミュニティもできない。

それでも東日本大震災の時には、仙台などでは、揺れが収まった後に高層マンションの1階に多くの人が降りてきて、共同で炊き出しを始めた例がいくつもあります。緊急時にはひとりではられない。エレベーターも止まっていえるし、いつまた大きな揺れがやってくるかわからない。



大阪のあるタワーマンションでの防災展示の様子。『地震イツモノート』に関連したパネルや防災グッズの実物を置くなどし、最終日には住民が参加する防災講座も実施

デベロッパーの側も、今は真剣に考え始めています。東日本大震災以降、関東の高層マンションでは、地震の度に大きな揺れがあり、住民の関心も高まっています。それを受け、水や食料などの備蓄システムを充実させ、住民向けの防災マニュアルづくりをし、自助としてのふだんの備えを勧めたりもしていますし、災害時には管理組合や管理会社がどう対応するのかを含めたオペレーションシステムのか構築などにも取り組みは始めています。さらに、従来はなかったことですが、今は周辺の町内会の活性化までを考えようというところにまで広がってきています。

私たちも、できるだけ多くの住民に関心を持ってもらい、参加してもらうため、工夫を凝らした防災・減災イベントを試みています。関西でも、大阪のあるタワーマンションでは、住民の誰もが通るロビーで防災展示を1週間行いました。関連グッズの実物や家具固定の効果がわかる模型を置くなどし、これを同時に後日の防災講座の告知としました。講座当日は、50人ほどが



レッドベア
ベアサバイバルキャンプの様子



大阪ガスが推進している「火育」ともコラボしており、火の扱いもプログラムに入っている

キャンプに参加した子どもたちが防災・減災に関する技を習得した際にもらえる、レッドベアサバイバルキャンプの「技バッジ」。このバッジを目指して子どもたちは必死にチャレンジ



非常食や非常時のトイレの講座などに参加し、「非常用設備探検ツアー」では屋上ヘリポートや受水層などを見学しました。これは、設備の確認だけでなく、住民同士の交流にもつながります。そこから、実際の緊急時には互いにどう安否確認し、助け合うのかを考えるような方向に進んでほしいと思います。

結局、一番の課題は住民の中の担い手づくりです。住民理事会などを対象にセミナーを開いたり、管理会社の社員が防災・減災講座もできるようにする研修システムを考えているところです。最近では、入居前から意識を変えようということで、マンション購入予定者対象の講座を催すこともしています。それは別に、私は、マンションの造り方自体を今一度考え直す時期ではないかと感じています。今後は、集まって暮らすことの意味を、ハード面だけでなく、コミュニティの視点からも総合的に考え直していく必要があるでしょう。

「プラス・クリエイティブ」による 社会的課題へのアプローチを

私たちは今、旧神戸生糸検査所の建物を再生活用するKIITTO（デザイン・クリエイティブセンター神戸）の運営を委託されていますが、ここでもアートやデザインの力を活用を深化させた「プラス・クリエイティブ」の手法で、さらに広汎な社会的課題にアプロ

チしていくと考えています。

なかでも阪神・淡路大震災を経験した神戸から、防災・減災のクリエイティブな動きを起こしていくことは大切です。その一つとして、今「レッドベアサバイバルキャンプ」という試みを始めています。キャンプを通じ、災害時に役立つ技などを子どもたちが身につけるようにしようというものです。そのプログラムを組み立てるに当たっても、消防局の人や学生やデザイナーなど様々なメンバーが集まって、事前にKIITTOで10回以上のゼミを実施しました。キャンプとして展開することや、技を習得した子が「技バッジ」をもらえるという案も、この時に出てきたアイデアです。

2012年の夏には、いわき市の教育委員会からのオファーがあり、キャンプを6カ所の公民館で実施しました。その際も事前のワークショップを実施し、現地の人たちに独自のプログラムを考えてもらい、新しく10種類のいわきバッジが生まれました。

今後、みんなで知恵を出し合うという「プラス・クリエイティブ」の考え方を実践しながら、それぞれの場所で次々に新しい担い手が生まれてくるようにしたい。それがひとつの理想のかたちだと私は考えているのです。

CEL

NPO法人プラス・アーツ
神戸事務所

〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4
デザイン・クリエイティブセンター神戸 307
TEL 078-335-1335 <http://plus-arts.net>